

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 45

関西大学博物館集報
平成14年9月30日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



石鏃 Arrow head

目次

理事長『博物館』を語る— (1)羽間家の文化財—	2
二程の墓	5
韓亨俊瓦窯の実測調査	8
展示の楽しみ—展示補助具などなど—	10
「明治の小袖」展 開催ご案内	
平成13年度「購入資料—中国陶磁器—」紹介	12
ハドリアヌス帝の壁—ビンドランダとローマン・アーミー・ミュージアム—	15

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-6368-1171 (直通) FAX 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

理事長『博物館』を語る

—(1)羽間家の文化財—

関西大学博物館では羽間平安関西大学理事長より、昨年度には具足一式¹⁾を、一昨年度には着物7領²⁾をご恵贈いただきました。

羽間家には「羽間文庫」という、江戸時代の天文学者間重富³⁾関連の資料を中心に、近世大阪の郷土資料を集めたコレクションがありました。このコレクションは大阪市立博物館に寄贈されましたが、関西大学博物館にいただいた上記の資料も羽間文庫由来の貴重な文化財の一部です。

今回、羽間家の文化財と博物館について羽間理事長にお話を伺う機会を設けていただきました。

1. 羽間家と間重富

——理事長先生、本日はお忙しいなか、『阡陵』のインタビューにご協力いただきましてありがとうございます。今回のインタビューは理事長先生よりいただきました資料の由来となった羽間文庫と関西大学博物館についてお伺いしたいと思います。

羽間家は大阪市福島区の海老江にあり、江戸時代の町人天文学者間重富の出た古いお家柄ですが、その由来をお聞かせいただけますでしょうか。

理事長：羽間という名前はね、人気があったんです。戦前の海老江には46か47軒あったんです。



インタビュー風景



海老江から淀川を臨む

けれどもうちの親戚は1軒もない。

というのは、毛利から蒲生が分かれて近江から淀川沿いにやってきて、中津、浦江、鷺洲、海老江、野田⁴⁾まで、その辺一帯に住み着いたんです。そしてみんな羽間と名乗った。でも、親戚とは全然違うんですよ。何て言うんですか、一党、言うんですかな。血族ではないので、一族とは言わないんですけどね。羽間一党、とこう言うんですね。一党として、みんなが誇り持って助け合って行けばいいと。

それで、そのうちの浦江の羽間と海老江の羽間が結婚して阿波座⁵⁾に行った。それが、間口が48mあって蔵が11あったという豪商になったんです。要するに銀行つくったわけなんです。——それが、間重富の「阿波座羽間家」ですね。

理事長：間重富はその7代目なんです。この間重富という人については、うちの父親なんかは「天文学者間重富」とこう言ってるんですけど、僕は非常にマルチ学問、学際を極めた人やと思うんです。というのはね、まず、幕府は天文方について、世襲ではもうやっていけない、賢い人が入らないといけないと言って、麻田剛立⁶⁾に要請を出したんです。けれども麻田剛立は、「自分はもう50歳やし、江戸まで行くことはできません。うちの門下に間重富いうて自分より10歳くらい年下の、知識も資力も持ってる者が

1) 詳細については、阡陵 No.44に掲載

2) 詳細については、阡陵 No.42に掲載

3) 江戸時代後期の天文歴算家。1756(宝暦6年) — 1816(文化13年)

4) 中津：大阪市北区 浦江、鷺洲、海老江、野田：大阪市福島区

5) 大阪市西区

6) 江戸時代中期の天文学者。門下に間重富・高橋至時がいる。1734(享保19年) — 1799(寛政11年)



間重富の肖像

(大阪市立博物館1999年「特別陳列羽間文庫
一町人天文学者間重富と大阪一」より)

居りますからこの人を行かせます」と言っただけですね。それで間重富が「わかりました」と引き受けたわけなんですけれども、その時に「私は家の仕事は放りませんよ」「江戸には行きっぱなしにはなりません」と言っただけなんです。それで、間重富よりまだ8歳年下の高橋至時⁷⁾と江戸へ行ったんです。そうして、3年間で寛政の改暦を行った。それから天文方から帰って来たんですけど、こう言っただけなんですわ。「自分は町人が本領やから、本業は怠りません。ただし、天文の御用は片時たりとも疎かにはしません」と。それで富田屋橋⁸⁾の天文台で一生懸命観測を続けた。だから、ひたすらに天文学にうち込んだ人や、ということなんですけど、僕はね、ちょっと先祖の見方が違うんです。

天文学だけやないと考えるんです。天文学をやった、暦学をやった学者です。これは古文書から窺い知れるわけですが、地理学にも秀でてた。そして地学をやってます。さらにお金を出して、傘屋の商人で勉強家の橋本宗吉⁹⁾という人を長崎に行かせて語学の勉強をさせてます。

僕はこの人は立派や、と。これは、ひとつの学際を極めてると思うんです。天文学、それに



兼葭堂日記復刻版

(奥付に羽間平三郎氏の名前が見られる)

派生して暦学、それに派生して地学、それと先進の国に学ぼうとして語学…。兼葭堂日記¹⁰⁾にね、間重富のことが随分出てます。間重富と兼葭堂、間重富と大塩平八郎¹¹⁾、こういう人たちがみんな繋がってるんですよ。

2. 羽間文庫の設立と木村兼葭堂日記

——理事長先生の先代の羽間平三郎氏は間重富の顕彰に尽力し、羽間文庫を設立されただけでなく、木村兼葭堂日記の復刻もされましたね。

理事長：うちの父親は兼葭堂日記に間重富のことが出てるっていうのでびっくりして、何べんも見に行ってたんです。そうしてるうちに欲しくなった。間重富が載ってるから。けれども、家計のこと考えたらお金はないし。それで一生懸命通って写本して、全部写本したんですよ。けれども欲しくて仕方がない。とうとう予約札貼ってしまった。それで買わないといけなくなってしまって、うちの母親は困ったのですけれど、でも、お父さんの顔つおすわけにはいかない、と言いましてね。借金はしなかったんですけど、お金の工面は大変やったんです。そうして兼葭堂日記を文庫に加え、人の勧めもあって復刻版¹²⁾を出したんですわ。

親父は間重富の「ひたすら」を尊敬してましたからね、自分もまねしてひたすらに祖先顕彰をした。一生懸命江戸時代の4代の天文学者、主には間重富を軸に研究して、重富に関連のあ

7) 江戸時代後期の天文学者。幕府の天文方に命ぜられ、間重富と共に寛政の改暦を行った。1764(明和元年)―1804(文化元年)

8) 大阪市西区新町

9) 江戸時代後期の蘭方医。大阪蘭学の基礎を築いた。1763(宝暦13年)―1836(天保7年)

10) 木村兼葭堂の自筆交友録。木村兼葭堂：江戸時代の本草学者、文人、蒐集家。1736(元文元年)―1802(享和2年)

11) 江戸時代後期の儒学者で、大坂町奉行所の与力を勤める。天保の飢饉に際し、大塩平八郎の乱をおこす。1793(寛政5年)―1838(天保9年)

12) 1972年(昭和47年)復刻版刊行



羽間平安理事長

るものを調べて、30年ほどかけて関係資料を集結し、羽間文庫を作ったんです。

羽間文庫は本にしても1万冊くらいあるんです。本入れる箱作るだけでも大変ですよ。湿気と呼ばない木とか、桐の何やとかいうて、箱や棚作ってね。金庫もね。金庫いうてもお金は一銭も入ってないんですよ。兼葭堂日記とか立派なものを入れて、土蔵に二重鍵してね。親父はこれを一紙半記も散らばらしたらあかん、と言っていました。

それで仕方がないから僕も除湿機買いましたね。蔵の中ってね、一日一升の水溜まりますね。それとらんかったら本が腐ってしまうんです。親父の頃は風通したりなんやしてたんですけどね、うちの家内が毎日一升の水とってたんです。

3. 羽間文庫寄贈顚末

——それだけ大切に保存されていた羽間文庫を大阪市へ寄贈されたいきさつをお聞かせいただけますでしょうか。

理事長：散らばらしたらあかん、ということが親父の遺言やったんですけれども、神戸の大震災¹³⁾があった。それで傷んだんです。門も傷んだ。土蔵もちょっと具合悪かった。とにかく蔵はね、修繕ができへんです。壁が1mもあるんですよ。そんなもの、誰が直せますか。震災の後やから左官屋もおりませんし。それで文庫を維持して行くのが困難になったんです。

そんなとこに、文庫を買い取りたいという話が来た。それを姉が知ってね、このまま置いといたら僕が売ってしまうと思ったんですね。僕信用ないんです。(笑)それで引き取り先を考えました。

大阪市にね、相蘇さん¹⁴⁾で羽間文庫に熱心な人が居りはるんです。相蘇さんに電話しましたら、喜んでですね、「一紙半記も散らばらしません、大阪市が命かけて守ります」と。「いつでも必要な時に言うてもろたら結構です」と言いはるので、大阪市の博物館¹⁵⁾に寄託することにしたんです。それで、姉にそう言うたら姉が怒りますねん。「寄託はあきません」て。「寄贈しなさい」て。「そんな中途半端なことしなさんな」て。仕方がないから、相蘇さんに、「あれな、やっぱり寄贈しますわ」て言ったら驚いて、「ほんまですか、普通は寄贈すると言ったのを、ちょっと待ってくれ、やっぱり寄託にするわ、て言うもんやのに、そんな話初めてです」というわけですよ。それで「気の変わらないうちに早くさせてください」て。トラック何台か来たんです。うちの家内が、「そんなけちなこと言わんと」て言いますからね、「蔵まで全部持って行け」言うたんですよ。そしたら、「蔵は堪忍してくれ」って。(笑)

ところが、参った。あのね、表札。家に表札無しにするんです。無茶ですよ、表札まで剥がして行っちゃって。南岳さん¹⁶⁾が書いたもの。その他にもね、間重富と全然関係無いのに、いろいろなものをみんな持って帰ったんです。着物なんかがそうなんですけど、うちの父親が兼葭堂日記に触手を伸ばしたように、その時代の背景として一生懸命集めたものとかね、家に伝来のもの、それをみんな持って帰ってしまった。「全部持って行け」言いましたしね、全部大阪市に寄贈したんです。

——羽間文庫を大阪市へ寄贈されたのが確か平成11年でした。本館が理事長先生より着物をいただいたのがその翌年の平成12年です。

今回はその辺のお話をお伺いしたいと思いますので、どうぞよろしくお伺いいたします。

(このインタビューは、関西大学博物館長及び博物館事務局が平成14年7月25日に行ったもので、今号と次号の2回に分けて掲載させていただきます。)

14) 現大阪歴史博物館館長

15) 大阪市立博物館。2001年(平成13年)に大阪歴史博物館として移転・リニューアルオープンした。

16) 藤澤南岳。江戸時代末期の儒学者。1842(天保13年) — 1920(大正9年)

13) 1995年(平成7年)の阪神・淡路大震災

二程の墓

吾妻重二

2002年3月26日、河南省伊川縣にある二程の墓を訪れた。本学の井上克人教授を研究代表者とする科研費による調査のひとつで、同行者は他に丹治昭義教授、奈良行博講師、および花園大学の吉田剛講師である。

朝、マイクロバスで鄭州を出発、中岳嵩山、少林寺を経て、午後に二程の墓に向かった。到着前、土地の女性に路を尋ねたとき、地図にある「二程墓」と言わずに「程夫子墓」という丁寧な答えが返ってきたのにまず驚いた。かつて二程の思想が唯心主義の権化として批判されていたことを考えると、まさに隔世の感というべきである。二程が再評価され、土地の人々にとっては郷里の偉人でもあることを、この呼称はよく表わしているように思われた。

伊川縣は洛陽からも近く、南へ20キロほどしか離れていない。かの龍門石窟の前を流れる伊河の上流に位置し、広々とした畑が続く田園地帯である。伊川縣の中心街は、今でこそかなり賑やかであるが、かつては府店という名の小鎮にすぎず、北宋の二程の時代には神陰郷と呼ばれていた。なお、今回は調査できなかったが、伊川縣内には他に、二程とともに洛陽に居住し、互いに親密に交遊した邵雍、文彦博の墓も営まれている。

さて、二程の墓は伊川縣中心街の西1.5キロ

ほどの郊外にある。白い屏にぐるりと囲まれ、柏樹が墓域の中にだけ生い茂っているのも、一目でそれとわかる。広大な畑の真ん中に、鬱蒼たる深緑の一区画が小島のように浮き出ているという感じで、すこぶる印象的である。墓域は東西205m、南北138m、面積約3万㎡というから相当広い。ここにはまず、後述する程珪が葬られたあと、程珪の死去に際して塋地120畝を賜わったと伝えられ、これが現在の墓域の基礎になったのである。

正面には立派な山門（中門）があり、「程園」という額が掲げられていた。墓地にしてはいかにも不釣り合いな大きな門なので、パンフレットを見ると、この門は1987年12月に新しく造られたものであった。「程園」という名前から窺い知られるように、ここを記念公園として開放し、観光地にしようという目的による所作であるらしい。墓域の本来の門は、この山門の左手にある小門だったようで、そこには「程祠」の額が掛かっていて、内側に墓祠（祠堂）が続いている（写真1）。そして、この墓祠の背後に程顥と程頤、および彼らの父程珪の墓があるのである。広い墓域内にはまた、一族の他の人物の墓家があり、その位置関係は、ひとまず山際明利氏の図を借りれば、図1のとおりである。



写真1 程園遠望
中央が新しい山門 左手が程祠の門

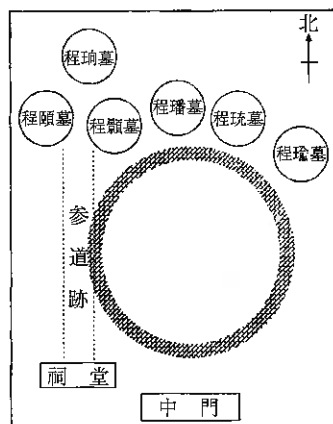


図1 程園概略図
(山際明利「北宋四子墓探訪記」『東方』2001年2月号)



写真3 墓祠享堂内部
中央が程珦、右が程顥、左が程頤

巻31に載っている。図2に示したのは程氏の家系であって、下線を付した人物がここに埋葬されているわけである。二程のこれ以外の子孫は、靖康の変のとき金軍の進入を逃れて南渡したために、ここに墓が営まれることは結局なかった。

さて、墓祠（祠堂）の方は、明の宣徳年間に建てられ、清代の重修を経て、最近修復されたものである。現在、東西の廂房は管理人の住まいになっていて、洗濯物が干してあり、子供が無邪気に出入りしたりしていた。そして、その一番奥に三間からなる享堂があり、程珦、程顥、程頤三人の塑像が置かれている（写真3）。この塑像は1987年の修復時に造り直されたもので、面白いことに、塑像の手前に功德箱が置いてある。功德箱は仏教寺院や道観によく見られ、日本の賽銭箱に相当するものであるが、これは、実在した個人が仏や神々に似たかたちで今も崇拜されていることを意味していて、たいへん興味深い。

墓祠の中庭には石碑が数点残っていた。韓国朱子学会による真新しい「二程夫子林」の碑も

あり、近年における顕彰の趨勢を示していた。墓祠内の壁には、修復の募金を呼びかける「捐資修繕程園倡議書」が貼ってあり、文中に、

「我們号召海内外程氏后裔及有識之士，少抽一包煙，少喝一杯酒，各尽所能，積極捐資」とある。「タバコ一箱を節約し、酒一杯を節約して、それぞれできる範囲で積極的に募金してほしい」というのであるが、何ともほほえましく、かつ切実な呼びかけではないか。

さて、墓域の中央は一面の菜の花畑であった。ちょうど満開の時期で、まばゆい黄色に輝く花に囲まれて、地元の人であろう、数人が車坐になってのんびり話をしている姿が見うけられた。墓地と菜の花と春遊という取り合わせ、これも正直、悪くない光景であった。短い滞在ではあったが、文献資料と現況を相互につきあわせることができたのもまた、大きな収穫であった。

（この文を草するにあたって、宮崎順子、緒方賢一両氏から資料の教示を得た。感謝申し上げたい。）

——大韓民国全羅南道長興郡——

韓亨俊瓦窯の実測調査

藤 原 学

2002年3月25日午前11時20分、関西大学で考古学を学ぶ3回生中野咲・2回生青木美香と私の3人は、韓国の金海国際空港到着ロビーで東国大学校慶州キャンパス博物館の金鎬詳研究員の出迎えを受けた。韓国への入国はもう25回を超えているが、今回は多少緊張している。大きな図面ケースを抱え、バッグの中にはカメラやメジャー類に加えて、水準器や水糸、定規、チョーク等いろんな実測用具を詰め込んでいるので、確かにいつもとは肩に掛かる重さが違う。そしてなによりも、この調査は私自身で計画して、韓国の研究者に呼びかけ実現した初めての海外での実測調査なので、その責任の重さを感じているのであろう。いつも満身の笑顔で出迎えてくれる金研究員に2人の同行者を紹介して、早々に彼の車に乗り込み、西230キロメートル先の全羅南道の「長興」を目指した。

長興に到着したのは午後4時。そこで韓国を代表する窯跡研究者である韓盛旭氏と昨年11月以来の再会を果たし、直ちに調査現場に向かった。長興から車で10分余り、奇岩を抱いた標高

518mの億佛山の東裾を南下すると安良面茅嶺里という小村につく。その村外れの街道の脇に調査目的の達磨窯は築かれている。

到着してすぐに窯の操業者である、韓国重要無形文化財第91号製瓦匠・韓亨俊氏の出迎えを受けた。1997年12月に取材に応じて頂いているので、4年4ヶ月ぶりである。その晩、韓亨俊氏を囲んでの宴席となったのは言うまでもないが、杯を交わしながらの雑談がまさに聞き取り調査でもあった。

翌26日から2日間、窯の実測には日本から参加した3人に加え、金鎬詳研究員、そして慶北大学校大学院生の李仁淑氏の5名で1945年製の達磨窯と格闘することとなった。海外なので十分な測量器械も持ち込めない。1台のレベルとわずかなメジャー、水球などで全長6m高さ2.50mの複雑な構造物の実測に挑戦するのであるから大変である。それでも27日の午後3時すぎには、おおよそ窯の図面に目途がついてきた。

夕日も大きく傾いた頃、最後に燃焼室内部の写真を撮ろうと、青木・中野さんが順に窯の中



写真1 実測調査中の韓亨俊瓦窯



写真2 瓦窯燃焼室の天井構造

に潜り込む。小さな燃焼室なので一人ずつしか入れないが、しばらくして出てくる2人はいずれも「すごい！」の一声。「何がすごいんだろう？」と思いつつ窯に入るが、ほとんど真っ暗だからカメラのピントも合わせようもない。しかたなくカメラを抱いたまま燃焼室の床に仰向けになっていると、そのうち焚き口から入る光で次第に目も慣れ、視野に飛び込んできたのが、瓦で満開の花のように見事に組み上げられた天井の構造であった。北関東藤岡瓦の窯師伊藤倉次氏との対談で聞いた「瓦を慎重に迫り出しながら両側から持ち送りつつ天井を架けてゆく」伝統的な天井架設技術の話が頭を過ぎる。見事！と言う外ない。これを見ただけでも、ここにきた甲斐があった。

達磨窯は16世紀以来、日本の燻瓦の焼成を担って来たわが国独特の窯炉である。20世紀初頭には日本より韓国に伝えられていたから、それが韓国に展開している理由は、日本による「韓国併合」という歴史以外の何物でもない。おそらく、歴史上、日本から韓国に伝えられて定着した唯一の窯炉技術が達磨窯なのである。そのことについては、拙書『達磨窯の研究』（2001年刊）にできる限り書いておいたが、まだ解明されなければならないことは多い。そしてこの窯は1945年に韓亨俊氏ともう一人の韓国人により構築されたと伝え、以来57年を経た現在も操業され、現役の達磨窯のなかでは、日本・韓国を見渡しても、また世界を見渡しても、おそらく最年長の達磨窯なのである。

この窯については、韓国国立文化財研究所の民俗芸能研究室が調査に入り、すでに『製瓦匠—韓国の重要無形文化財①—』として1996年に



写真3 焼成室内の瓦

報告され、瓦の製作・焼成記録が90分のビデオ映像として残されている。その報告には窯の寸法を記入した構造概要図が掲載されているが、日本各地の達磨窯の系譜を踏まえて、本窯が構築されるに至った事情を歴史的に評価するには、もっと詳細な構造図を必要とする。今回の実測は正にそのための作業のひとつでもあった。

韓国考古学の世界では、韓国に伝えられた日本の文化所産を「日系遺物」という。全羅南道では「円筒形土器」と呼ばれる古墳を巡る埴輪円筒が代表格であるが、この達磨窯は古代・三国時代のものでなく、正しく近代の「日系遺構」で、植民地時代の日系生産遺構を日韓両国の研究者が調査していることとなる。そして、確かに達磨窯は日本から伝わった窯炉形態ではあっても、製瓦技術全体を見渡した場合、現代の製瓦各工程の用具、技術のどれが韓国独自のもので、どれが日系なのかは随分難しい問題であることがこの瓦工場を見るだけでも分かる。千数百年の造瓦の長い双方の歴史があって、この窯があるといえども最後の数十年の歴史だけを特に増幅してみることは、少なくとも技術の世界では間違っている。この難しい課題は、日韓両国の研究者が各分野に及ぶ緻密な調査を続けるしか解決の方法がない。この調査はそのためのささやかな一歩である。ぜひ、いい成果の実測図と調査所見を、日韓の双方で発表したいと考えている。

展示の楽しみ

——展示補助具などなど——

井 溪 明

展示をすると言うことは、資料をいかに見て貰うかという工夫の上に成り立っていることは言うまでもない。そこには展示を企画した学芸員の思いが込められていなければならないこともしかりである。それらの展示を実現するために学芸員は様々な工夫を凝らしている。企画展や常設展でもしかりであるが、それらの工夫を見ることは筆者にとって展覧会の楽しみのひとつとなっている。とりわけ現場を離れている今、自分が展示に携われない分だけに、岡目八目ではないが、その工夫次第に大いに目がいく昨今である。

世の風は博物館世界にも厳しく吹いている。つい数年前頃までは名品さえ並べておけば、人が集まってくる時代であった。しかし最近、名品のみならず資料全般に対する目は、展覧会はもとより出版物やメディアなどを通じて十分に養われて来つつある。学芸員が独りよがりともいえる展示をしても、観覧側に知識が無い分致し方ないかといった時代は昔話となりつつある。資料を如何に分かり易く展示するかということは、学芸員の資料に対する姿勢自体でもあることが問われている。ひいてはそれが冬の時代を乗り切る大きな礎であることはいうまでもない。

その手段として、資料自体に語って貰う工夫をすることは第一義であるが、よりよく行うための補助的作業が必要となる。今回の副題である展示補助具とはそのような役割を果たす必要不可欠な小道具達である。

展示補助具とは、通常歴史系博物館では、展示台・ガラス棒（ケサンともいう）・アクリル等の滑り止め棒・自在・屏風留・袱紗等の敷布・テグス糸・綿枕・ウレタンホームなどが主なものである。これらを効果的に活用して資料をよりよく見せることは通常行われていることである。しかし、これから記すのは、これらの補助具を使いながらもさして効果的に資料が見せられていないことに対する、現場を退いている

一観覧者の困惑とでもいったものである。

例えば掛軸である。自在を用いているにもかかわらず、その軸の高さが適当かどうか、どんなことを基準に学芸員がそれを定めたのか一向にわからないような場合が少なくない。暫くは、ためつすがめつその理由を考えるのだが判らない。親しい学芸員がいる場合尋ねてみると、多くは目線に合わせたという答えが返ってくる。しからば誰の目線かという、学芸員の目線である場合が多い。最近の博物館を支えているのは、中高年の女性を中心とした年輩の男女、それに集団で観覧に来ることの多い小学生である。彼等にとっての目線ではないのである。前回筆者は、掛軸の目線のことに触れたが、工夫がほしいものである。さらに言えば、最近の展示ケースは多目的展示に耐えるため、かなり奥行きが深く取られている事が多い。そのような時小品を展示しても眼のいい人や双眼鏡でもない限り見えない。最近の可動壁を備えた館なら壁面を前進させるとか、無いところは展示用斜台に乗せて前に置くと考えられないのであろうか。

展示台についていえば、よくあることだが、資料を一点ずつ恭しく展示台に置き、それぞれ10センチほどの間隔ですらっと並べている。さらに間に斜台などが交じるような例を見ることがままある。観覧者は展示台の見本市を見に来ているのではない。このような場合は同型の展示台を連続させてその上に適宜の間隔で資料を並べる方がよほど目なじみが良い。特定の資料を際立たせたいなら袱紗などを利用すればよいであろう。この展示台の位置もなぜか深いことが多い。なぜ台に乗せるのかというと、よりよく見て貰おうとするからであろう。それならば出来るだけ観覧側に台を寄せると共に資料も出来る限り前に持ってゆく必要がある。先ほど触れた人達の視力深度は概ね40センチまでであると思えばよいであろう。また通常ネームプレートや解説板が前方に置かれその後ろに資料が並

べられる。資料がプレート群より大きい場合はバランス的にそれほど目立たないが、小さい資料の時にでんと前に置かれているのは明らかに鑑賞の妨げとなる。そのような時にかにプレート群を処理するかは学芸員の力量ともいえる。また展示台一面に資料が何点か置かれているとき、それぞれの前に小札の如くプレートを置くのではなく、一ヶ所にそれぞれが判るように纏めて置くようなセンスも必要であろう。

最近是一部で耐震ケースなど用いられるようになってきたが、器物、とりわけ陶磁器類の防震の中心はまだテグス糸であろう。小人国へいったガリバーよろしく四方に一見がっかりとテグスが引かれた例をそこここで見受ける。しかし資料表面の一部に糸が触れて擦れるなどの軽

そうではあるがそれなりのダメージが考えられる。また観覧側からしても安心の保障と言うにはあまりに息苦しくむごたらしさも覚える。アクリル樹脂系の五徳などを使ってもう少しスマートな工夫が出来ないものであろうか。

資料を崇め奉って展示する時代はすでに終わりつつある。むしろ資料が持っている歴史性を十分に尊重しつつ、如何にそれを引き出してゆくか学芸員の力量であるかが問われる時代である。資料のもつ内在的な一面を、はっとするような形で表出させてくれるような、しかも資料や観覧側にもストレスを与えない展示に出会えることを楽しみに、また博物館通いを続けてゆきたいと思う日々である。

『一羽間家伝来—明治の小袖』展 開催ご案内

於：大阪歴史博物館

平成14年 9月25日(水)から10月21日(月)まで、大阪歴史博物館において、特集展示「一羽間家伝来—明治の小袖」展が開催されます。

この展示会には、羽間平安理事長が平成12年度に大阪市へご寄贈されました小袖13領と、関西大学博物館へいただいた小袖7領のうち4領、あわせて17領の小袖が展示されています。



今回展示の小袖は、明治期に京都で製作されたもので、明治の京都では、江戸時代から連続と続く染織技術を基礎に、新たに渡来した西洋化学染料等を用いた鮮やかな友禅染が流行するようになっていました。羽間家伝来の小袖も、洗練された見事な友禅染が中心となっており、仕立ての形式や文様等から推して、京舞などの舞踏の衣装として使用されたと考えられる希少性の高いものです。これらの小袖を一堂に展示することによって、小袖製作に関わった職人達の技術の確かさや、明治期の小袖の魅力や美意識などが伝わる展示となっています。

関西大学博物館所蔵の小袖と同じモチーフの文様の小袖を並べて展示するなど、普段は一堂に見ることができない貴重な機会ですので、ぜひご覧いただきたいと存じます。

記

1. 名 称 特集展示
「一羽間家伝来—明治の小袖」展
2. 会 場 大阪歴史博物館
3. 会 期 平成14年 9月25日(水)から
平成14年10月21日(月)まで
(K.K)

平成13年度「購入資料—中国陶磁器—」紹介

高橋 隆博

博物館の資料購入費はごく少ない。しかし、まことに貴重な予算を預かっているわけで、購入資料の選定には腐心している。資料収集の根幹は、博物館の将来構想に鑑みることとはもとより、学生の研究と教育にいかにより有効的に機能させるか、つきつめればこの2点に収斂されよう。従って、資料（作品）の「レベル」を見極める眼力を養うためにも、館員はいささかの懈怠も許されない。博物館は、資料研究を精力的にすすめ、情報収集にも細心の注意をはらい、地道な研鑽を積み重ねている。

平成13年度は、4点の中国陶磁器を購入した。これまで中国・漢代の緑釉陶器、唐代の白釉陶器など中国陶磁器を数点購入しており、将来的

には収集品による「中国陶磁器展」をも企画したいと構想している。今回の購入は、そうした基本計画に基づいている。

1、青磁大皿（明代初期）

青磁の色調は、釉薬の中に含まれる微量の酸化第二鉄が焼成中に還元されて酸化第一鉄となって発色する。青磁器は、東洋わけても中国と朝鮮半島を代表するやきものである。技法的には灰釉に淵源し、春秋時代（BC 6～BC 5世紀）に遡るが、本格的な焼成は後漢以降の越州窯（江南地方）である。そして、晩唐から五代にかけての余姚窯（浙江省）は中国随一の名窯といわれ、余姚窯の青磁器は「秘色青磁」の名で貴ば



青磁大皿



五彩花鳥「魁」字文鉢

れた。宋代に入ると、龍泉窯（浙江省龍泉県一帯）が主流となり、南宋代には質の高い青磁（日本では砧青磁という）を製して、中国第一の青磁窯の名をほしいままにし、次いで元・明時代には濃い黄緑色を発色する青磁器を生み出した（砧青磁に比べて淡黄色をおびる）。

朝鮮半島では、高麗時代に宋代青磁の影響を受け、名状しがたい翡色の釉肌が絶対の魅力となっている青磁器がつくられ、それは東洋陶磁史に燦然と輝き確固たる地位を得ている。その美質は、本家中国の宋・元の青磁に比肩するほど高雅であり、「翡色青磁」の名で称賛を集めた。また、生地に白土を埋め込んで文様をあらわす象嵌青磁は、高麗が生んだまったく独創的な技法である。

この青磁大皿は、濃い黄緑色の色調といい、全体の細かな陰刻文といい、いずれも龍泉窯青磁器の特徴をよくあらわしている。こうした青磁を、日本では天竜寺青磁と呼んでいる。この

名称は、足利尊氏が天竜寺を造営する資金を得るために元に派遣した幕府公許の貿易船が舶載したことから、また索彦禅師が中国から持ち帰った天竜寺に伝わる青磁浮牡丹香炉にちなんで命名されたとの伝承があるが明確ではない。

2、五彩花鳥「魁」字文鉢（明代後期）

たっぷりとした大型の鉢で、見込みに「魁」の文字を記すところから、世に「魁手」の鉢と呼ばれている。胴部には、黒釉の線描きと赤、緑釉を用いて蓮池水禽文をあらわし、胴の上縁部に窓わくをつくり、そこに双魚や双鳥、双兔文を描いている。見込みには「魁」字を記し、その周囲に藻魚文を配している。典型的な明時代の「魁」手鉢の優品である。五彩（呉須赤絵）の大皿や鉢は日本に数多くもたらされたが、この種の鉢は茶席では菓子鉢として用いられ、とりわけ珍重された。

赤や緑、黒色などの濃厚鮮明な顔料をつかつ



青花白磁花文鉢



青花白磁花鳥文大皿

て文様をあらわす色絵を五彩というが、日本では茶人たちによって呉須赤絵と言いつゝらされてきた。呉須とは、染付けの顔料であるコバルトの意味のことだが、なにゆゑにコバルトを使つていない色絵を呉須赤絵と称したのか、その理由はわからない。

欧米ではスワトウ・ウェア（汕頭磁器）と呼んでいる。これは、呉須赤絵が広東省汕頭港から積み出されたとの俗説から生まれた呼称だが、明末・清初のオランダへの輸出港は厦門（アモイ）近傍の石碼（シイマ）の外港にあたる福建省漳州であり、欧米における呼称のよりどころも不明である。しかしながら、積み出し港は生産地を裏づけてくれる。呉須赤絵の焼成地はなお明らかではないものの、官窯である景德鎮窯（江西省）以外の、少なくとも現在の福建省南部から広東省東部にかけての民窯において、明代後期の万暦年間から明代末に焼成されたことは疑いない。

日本への請来時期だが、一つは嘉靖（1522～1566）末期以来、広東省の澳門（マカオ）を前線基地としたポルトガルを通じて、二つは朱印船貿易の舶載品として、三つ目は17世紀初頭から陶磁器を中国から直接購入しはじめるオランダ東印度会社を経由して日本にもたらされた。

3、青花白磁花文鉢（明代後期）

見込みに真上から鑑賞した花文を、内側の周縁部には山水樓閣図を描く。胴部には、見込みと同じ花文を四つあらし、その間に立蓮華文を配している。文様はすべて呉須（染付）で描かれている。また、口縁部は白い釉薬が剥落し素地が露出している。これを、いわゆる「虫喰い」という。やや濁った白の釉薬といい、文様といい、そして虫喰いといい、わが国でいうところの古染付の典型的な作品といえる。

青花は、中国では青花白磁にあたり、青い顔料のコバルト（呉須）で花文様を絵付けしたというほどの意であり、日本では染付と呼ぶ。明代末期から清代初期にかけての動乱期に、景德

鎮の民窯でつくられた青花白磁のことを、わが国では南京染付と総称した。この名称は、「中国染付」「南京渡来の染付」の意で、南京豪商の商う生糸とともに舶載された染付白磁のことである。とりわけ、明代最末期の天啓年間（1621～27）に、日本からの注文でつくられた茶道具や飲食器をとくに古染付と呼び、茶人たちに珍重されてきた。この古染付の鉢も茶席の菓子鉢として使われたものであろう。

隆慶五年（1571）、膨大な数量の御器の焼造が命ぜられたことや万暦年間の大量生産が災いし、景德鎮周辺の胎土は枯渇に瀕した。ために胎土（珪石質長石と粘土質カオリンをあわせる）の質が粗悪となり、焼成中に生地と釉薬との収縮率の違いから、薄くかかる口縁部の釉薬が生地から剥離し、そこに小さな気孔ができ、焼成後に釉薬の層が破れるのである。いわば粗器なのだが、日本ではこれを「味わい」とみなし、茶人や文人がことのほか賞翫してきた。

4、青花白磁花鳥文大皿（明代後期）

皿の中央に蓮池水禽文をおき、周縁部を八つに区画割りして、それぞれに稜花形文を描き、さらにその中に花文をあらわしている。花文はチューリップを便化したもので、こうした意匠の青花白磁を「芙蓉手」という。

芙蓉手の青花白磁は、同じ時期に、華南つまり呉須手や呉須赤絵を製した広東や福建の民窯ではなく、景德鎮の民窯で焼成された。もともとは、ヨーロッパの注文による陶磁器であつて、そのために西欧趣味のデザインとなっている。チューリップ様の花文はこのことを如実に示してくれる。

芙蓉手の作例中には万暦年製の銘があり、その頃から製されたものといえる。おもにオランダの東印度会社によって西欧に輸出された。江戸時代、日本にも大量にもたらされ、それが有田で模倣され、ヨーロッパに大量に輸出されていることは興味深い。

ハドリアヌス帝の壁

——ビンドランダとローマン・アーミー・ミュージアム——

山口 卓也

イギリスは、各地に大小、特色のあるたくさんの博物館・美術館を有しているが、その多くが、トラスト、場合によっては個人により設立、運営されている。

イングランド北部、カーライルからニューカッスルまで、典型的な周氷河地形の丘陵の中を、東西に走る道路 A69 の北側に、つかず離れずに見え隠れする石垣は、一般に「ハドリアヌス帝の壁 (Hadrian's Wall)」と称されるローマ皇帝ハドリアヌス (76~138AD) の頃建設された長城で、1987年には世界遺産として登録されている。ローマ帝国北辺のこの長城は、宣撫の及ばないスコットランド諸部族の南下を押さえるため、ハドリアヌス以前から、何度も場所を変えて建設されてきているが、この「壁」がもっとも最後の防壁となっている。

この長城の西部に、ビンドランダ (Vindolanda) とローマン・アーミー・ミュージアム (Roman Army Museum) がある。ビンドランダは、「壁」から少し離れて構築されたローマ軍の駐屯する典型的な城塞 (Fort) と付属する町の遺跡で、現在も発掘調査が継続されている。発掘作業は積極的に見学することが可能なように進められている。遺跡内には、出土品を中心とした博物館とローマ神殿、家屋、城壁を復元した野外展示がある。ローマン・アーミー・ミュージアムは、出土品の展示とともに、この地に駐屯したローマ軍兵士の生活に焦点をあてた再現フィルムなどが用意され、「壁」の実態

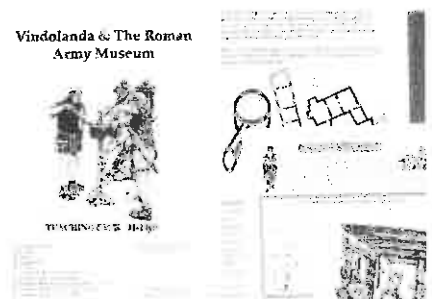
の理解を促す工夫に特徴がある。両者は同じトラスト (The Vindolanda Trust: Bardon Mill Hexham Northumberland NE47 7JN, UK, <http://www.vindolanda.com/>, Vindolandatrust@BTinternet.com) が運営している。

両者は「壁」で至近に結ばれているので、一般の見学コースとしてよく利用されていることから、トラストでは、学校児童の団体での見学誘致のために教材 (Teaching Pack) を作成している。この教材は11歳から14歳の学校・児童を引率する教師を対象としている。両博物館と遺跡の説明、生徒用教材作成用の切り張り原図から、周辺で徒歩で見学できる「壁」遺跡の案内、どこにバスの駐車場があるか、道路案内やトイレはどこか、待機中のドライバーのコーヒー接待の案内までである。見学旅行のプランニング用資料としても、教師の負担を軽減する工夫が凝らされている。内容は良くできた教材でありながら、また周到に考えられた広報材料でもあった。夏休みには多数の学校団体を乗せた大型バスが到着していたのは、教材の効果であろうか。頒価は3ポンド、両博物館の共通入場券は大人5.6ポンドであった。

この二つの博物館は、イギリス人の祖先であろう当時のブリテン島先住民よりも、ローマ軍兵士と市民に心理的な共感のある展示をおこなっている。両館と「壁」が多数の見学者を集めているのは、現在のイギリス人の歴史的心証の反映として、たいへん興味深い。



発掘中のビンドランダ



教材

博物館だより

◇平成14年度博物館企画展「明日香・大和と関西大学の考古学—高松塚古墳発掘30周年—」を、4月8日(月)～5月18日(土)の期間に開催いたしました。4月7日(日)と5月19日(日)の特別開館日を合わせると約2000名の入館者がありました。

今年は高松塚古墳発掘30周年にあたります。30年前の昭和47年に高松塚古墳で色鮮やかな壁画が発見され、当時話題になりましたが、最近のキトラ古墳での壁画の発見により、再び高松塚古墳の壁画が注目されています。この高松塚古墳発掘当時の様子や高松塚古墳石棺の復元模型、関連資料としてキトラ古墳のパネル等が展示され、見学者の興味をひきました。

また、4月27日(土)午後1時から平成14年度関西大学博物館講座「高松塚古墳壁画発掘、その日とその後」を行いました。当時学生として発掘に参加し、現在も考古学者として第一線で活躍している吹田市立博物館の藤原学氏と芦屋市教育委員会の森岡秀人氏にお話をいただき、約50名の聴講者がありました。

◇平成14年度開催の考古学入門講座を、下記の要領で開催いたします。ぜひご参加ください。今回は「東アジアの「よろい」と「かぶと」」をテーマに取り上げます。各講座の内容は以下のとおりです。



第1講 10月26日(土)	東アジアの「よろい」と「かぶと」 関西大学名誉教授 関西大学飛鳥文化研究所所長 網干善教
第2講 11月2日(土)	朝鮮半島の「よろい」と「かぶと」 大阪市文化財協会調査研究部第2係長 高橋工
第3講 11月9日(土)	中国の「よろい」と「かぶと」 奈良文化女子短期大学助教授 来村多加史
第4講 11月16日(土)	古墳時代の「よろい」と「かぶと」 御所市教育委員会学芸員 藤田和尊
第5講 11月23日(土)	平安時代以降の「よろい」と「かぶと」 奈良県立美術館館長 宮崎隆旨

会場：関西大学天六キャンパス（大阪市北区長柄西1-3-22）309教室

時間：午後1時30分～午後3時30分

お問合せは、関西大学事業局事業課へ

編集後記

『肝陵』第45号をお届けいたします。

平成14年3月末をもちまして上井久義前館長がご退任されました。在任中のご支援ご厚情に深謝いたします。4月より新館長として、高橋隆博館長が就任いたしております。前館長同様、ご支援ご鞭撻くださいますようよろしくお願い申し上げます。

今号は吾妻重二教授、吹田市立博物館の藤原学氏、堺市教育委員会の井深明氏に玉稿をいただきました。また、高橋隆博館長には、平成13年度の購入資料についてご紹介をいた

できました。ご執筆くださいました先生方に感謝申し上げます。

今回、羽間平安理事長へのインタビューを企画し、一昨年度、昨年度とご寄贈くださいました資料の由来である羽間文庫と今後の関西大学博物館についてお話をいただきました。お忙しいなか博物館のためにお時間を割いていただき、心より感謝申し上げます。

表紙は石鏃です。本山資料で、形態が無茎式の凹基式鏃であることから、縄文時代早・前期を中心とするものと考えられています。